三人の天の御遣い・改

S

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
三人の天の御遣い・改

【Ｎコード】
Ｎ４１０４Ｘ

【作者名】
Ｓ

【あらすじ】
事故に巻き込まれ外史に飛ばされた
せせらぎ終夜、古城矢吹、そして北郷一刀。
この三人は外史でどの様に生きるのか。
そして彼等は乱世を治めることが出来るのか？
イレギュラーの二人を巻き込んだ外史が今始まる。

一話　序章（前書き）

こんにちわ～
再挑戦です。
やっぱり少し設定を変えます。
何と言うかまぁ、変えたのは色々です。
何と言うかもしかしたら前作の『真・恋姫？無双三人の天の御遣い』
とは
全くの別作品になるかもしれませんがよろしくお願いします。
では、始まり～

一話　序章

ある三人の少年が道を歩いている。

「なぁ、一刀～」

ある一人の少年に話しかける。
その少年の名は『古城矢吹』。
三人の中でも最も正直で最も義理人情に厚い少年と言えるだろう。

「何だ？矢吹」

矢吹に話し掛けられた少年は『北郷一刀』。
三人の中では最も優しいが『悪』と言う人種には全く容赦しない少年。

「何で俺達って彼女が居ないんだろうな～」

「お前はバカか？何故そんなに欲望に正直なんだ」

そう呆れた表情で言ったのは『潺終夜（せせらぎ）』。
三人の中で最も冷静で現実主義者。

「終夜は現実主義過ぎんだよ～
もっと、夢を見ようぜ～」

「バカか……夢を見過ぎるといつか失望するぞ」

終夜はそう冷たく言い放っているが別に矢吹のことが嫌いな訳では

ない。
むしろ親友として信頼している。
「失望しても良いから夢見たいんだよ！。
いつか、女の子だらけの島に漂流したいんだよ！」
「「はぁ……」」
その言葉に二人は呆れて溜め息をつく。
そのまま二人は矢吹をおいて歩いて行く。
それを見た矢吹は慌てて走って二人に追いつく。
「しかし……矢吹の言うことも確かか……」
「「え？」」
終夜が今まで矢吹の言うことに賛同したことは無い。
なのに今賛同したことに二人は驚いている。
「矢吹の言う通りかもしれん……
こんな退屈な人生を俺達は送って死んでいくんだからな、夢を見ていた方が人生は
楽しいかもしれん」
「「……」」
終夜の言ったことに二人共賛同しているらしい。
俯いて黙ってしまった。
「二人共そろそろ行くぞ。

帰りが遅くなると不味い」

「「ああ」」

二人がそう返事したのを聞いて終夜は歩き始める。

すると……

「そこの三人！危ないぞーーーー！」

「「「え？」」」

ドゴォォォォォッン！

そんな轟音が響き渡り三人の居た所に鉄骨が落ちた……

一話　序章（後書き）

始まりは大体こんな感じです。
駄文ですがこれからよろしくお願いします。
では、また次回。

二話　それぞれの道へ（一刀編）（前書き）

こんにちわ～
まぁ、まずは本編の主人公の一刀から行ってみましょう。
主人公二人の√を変えました。
では、始まり～

二話　それぞれの道へ（一刀編）

一体どうなったんだ？
俺は矢吹や終夜と一緒に歩いてて……
それで……と言うかまず、何で俺の目の前が真っ暗なのかが疑問だ。
あ、目を瞑ってるからか……
そんなことに気付かないなんてな。
取りあえず目を開けるか。
俺はそう思い目を開けてみる。
すると……

「何と言うことでしょう」

なんてギャグを言うほど俺は余裕がある訳無い。
俺の目の前には日本なんて言う国の面影は無い。
もしかして……

「タイムトラベルか？」

俺は思い当たる言葉を呟いてみる。
この前テレビでやっていたがタイムトラベルは絶対に無いとは言い切れないらしい。
過去にはいくつかの例があり突然行方をくらませた者が未来に起きることを言い当てたなんて例もある。

「はぁ～どうやったら元の世界に戻れるのかなぁ……」

はっきり言って元の世界に戻れる自信が無い……

「これからどうすれば良いんだよ……」

俺はそう言いながら空を見る。

空には雲がある。

雲は俺に起こったことは極小さなことだと言う様に空を泳いでいた。

「『生きている限り無意味なことなんて無い』か……

師匠、今、俺に起こってることも意味はあるんですか？」

俺は空に向かって一人呟いた。

でも、その質問に答えてくれる人なんて居る訳が無い。

「じっとしててもしょうがないな。

歩くか……ん？これは……」

近くにあったのは俺の愛刀『瓶割刀』

「何でこんな所に……確か本家に保管されてるんじゃ無かったか？」

俺はそう呟きながら瓶割刀を拾う。

すると

「おい、兄ちゃん！珍しい服を着てるじゃねぇか！」

「は、早くその服を渡すんだな」

「早くしな！」

声のする方を振り向いてみるとそこには昔風の服を着た男三人が居た。

「（やっぱりタイムトラベルか）
悪いけどこの服を渡す訳にはいかないんだ。
それでも無理矢理この服を奪おうって思うんなら……」

俺は自分の相棒である瓶割刀を抜いた。
瓶割刀は戦国時代初期の一刀流の始祖、伊藤一刀斎の愛刀。
一刀流から様々な流派が派生したらしいが俺が祖父から受け継いで師匠の下で昇華させた流派はどんな歴史書にも載っていない流派『不活一刀流』。
その流派の真髄は至極単純。
敵は必ず活かさずに抹殺すること。
そして、俺は今警告している。
『俺の敵になりたく無ければ今すぐ去れ』と。

「ふざけるな！やっちまえ！」

「「おう！」」

残念だ……
あまり人は殺したくないんだがな……
すると

「待てい！」

その声のした方を見ると一人の少女が居た。
その少女はこちらに来て盗賊達の前に立ちふさがった。

「何もんだ！」

「一人の少年を三人掛りで襲う様な外道に名乗る名は無い！」
少女はそう言って三人の盗賊達に襲い掛る。
なかなかの連撃だな……
だが、まだまだ……
「お前等逃げるぞ！」
盗賊達の頭領らしい男はそう叫んで逃げて行った。
「待て！」
少女は盗賊達を逃がす気が無いらしい。
追いかけていく。
「大丈夫ですか～？」
「え？」
そんな呑気な声を聞いて声のする方を向くとそこには頭に人形（？）を乗せた少女が居た。
「この辺りは盗賊が比較的に少ない地域なのですが……
運が悪かったですね」
一応話しを合わせた方が良いと思い話を始める。
「ああ、全くだ……
それよりここどこだ？俺は旅人でこの大陸には来たばかりなんだが」

「旅人さんですか～ここは陳留の郊外です」
陳留？確か魏の領土だったような……
あ～三国志の時代にタイムスリップしたのか……
一番来たく無い時代だな……
「そうか……それと序で聞くけどこっちでやっちゃいけないことってあるか？」
「あります」
そう言ったのは眼鏡をかけたしっかりしていそうな少女。
「他人を認められても無いのに真名で呼ぶことです。
真名と言うのはとても神聖な名でその人の生き様を示す物です。
もし、真名を認められて無いのに呼んだら……首を刎ねられても仕方ありません」
「おいおい……物騒だな……
まぁ、こっちではそれが当たり前なんだな？」
真名ってもしかして『誓名』と同じようなものかな？
でも誓名を知ってる人なんてそうは居ないだろうなぁ……
「その通り」
先程盗賊達を追っていた少女が戻って来た。
「さっきは助けてくれたありがと」

「いえ、本当なら助けが要らないと顔に書いてありましたが厄介事に手を出すのが面白くて」

「……なんて面倒な性格」

「ははははっ！良く言われます！」

分かってるなら治せよ……

「それより美しい得物ですな。何と言う物ですかな？」

「ああ、刀って言ってな。名は瓶割刀って言うんだ」

「瓶割刀ですか？瓶でも割れるのですか？」

「ああ、何でもある家の瓶に隠れていた賊を瓶ごと真っ二つにしてそう呼ばれたらしい」

そう言いながら俺は瓶割刀を鞘にしまう。

「ほう……」

あ、やばい……何か地雷踏んだ様な気がする……

「そ、それより！君達の名前を聞かせてくれ。ずっと『君』じゃ何かさ」

「そうですな。
我が性は『趙』名は『雲』字は『子龍』」
おいおい……嘘だろ？
あの趙子龍だと？
まじかよ……
「私は戯志才と名乗っておきましょう」
『名乗っておきましょう』って偽名かよ……
「私の性は『程』名は『？』字は『仲徳』です～」
祖父さん……俺は今とんでもない所に来ています……
あの有名な三人が女の人になってます……
何この状況……
まじありえないんですけど……
おっと！俺も名乗らないとな。
「俺は北郷一刀。
この大陸の人の名前とは少し違う所があるけどそれが俺の名前だよ」
「それより北郷殿」
「ん？」
「私と手合わせ願いたい」
騙せなかったか……

しょうがない……

「そっちの得物が折れるかもしれないけど良いかい？」

「良いでしょう」

自信満々な顔だな～

俺無傷で済むかな……

「星ちゃ～ん、官軍です～」

程？がそう言ってとある方向を指す。

その方向には馬に乗り鎧を着た者達が居た。

「うむ……北郷殿残念だが手合わせはまた今度。

官軍が絡むと面白いことも詰まらないことになるのでな」

「さようなら～」

「また今度」

三人はそう言ってその場から立ち去った。

俺はそれを呆然と見てて……

俺はそれを追え無くて……

そして、その場に残ってしまった。

そして、瞬く間に軍に囲まれてしまった。

俺は一応瓶割刀に手をかける。

「華琳様！こ奴は……」

「違うわね……目撃情報と一致しないわ」
「ならばこの者は何者でしょう？」
何だか俺抜きで話しが進んでるな……
はぁ……
「あなた、何者？」
「俺は北郷一刀。
まぁ、色々あってこの大陸に来た者だよ」
「貴様！華琳様に向かってその口の利き方は何事だ！」
そう言いながら黒髪の少女は俺に向かって斬りかかって来る。
だが……
ガキンッ！
「攻撃が直線的だな」
俺は瓶割刀を瞬間的に抜いてその少女の攻撃を受け止めていた。
「ふぅ……あ～そこの～……この子の上司っぽい人～。
早く止めた方が良いよ。俺の流派の真髄は敵を必ず抹殺することだから。
俺がこの子を敵と見る前に止めた方が良いよ？」
「！春蘭やめなさい！」

「ぎょ、御意！」

俺に斬りかかって来た少女は上司らしい少女の命令に従い剣を収める。

「この子が申し訳ないことをしたわね。
私の性は『曹』名は『操』字は『孟徳』よ」

え？

「姉者が申し訳ない。
私の性は『夏候』名は『淵』字は『妙才』だ」

はい？

「……私の性は『夏候』名は『惇』字は『元譲』だ」

まじ？

「まじかよ……」

「どうしたのかしら？」

「いや……ちょっと……今の状況に混乱してる」

「「「？」」」

曹操に夏候淵や夏候惇ってめちゃくちゃ有名じゃん……
趙雲とか、程？とかが女の子って本当にすごい状況だ……

「えっと……曹操さん、今の俺はね、あなたが普通の最中にいきなり変な所に連れてこられて
目の前に劉邦と項羽って名乗る人達が居るっていう状況なんだよ」

「「「はぁ？」」」

「いや、そう言いたくなる気持ちはものすごく分かるんだ。
でも、本当なんだよね」

「あなたは私達よりもずっと先の時代から来た。
そう言ってるのかしら？」

「流石曹孟徳、理解が早い」

「！私の字を知ってるのもそう言うことなのね」

曹操さんは少し俺を警戒している様な態度を取る。
それを見て夏候惇と夏候淵もいつでも俺を殺せる構えを取る。

「まぁ、この話はここまでで良いでしょ？
曹操さん達はこんな所で何をしに来たんだい？」

「私達は太平要術の書を盗賊に盗まれたから追いに来たのよ」

確か南華老仙が書いた奴だよな？
多分さっきの奴等が取って行ったのかな？

「さっき盗賊達が来てたけど？
因みにその盗賊達の特徴はヒゲのノッポとチビとデブ」

「華琳様、目撃情報と一致します」

「そうね。
あなたしばらく私達の調査に協力なさい」

「分かったよ。
俺にはこの時代を生きる手段が無いからね」

そして、俺は彼女達に協力することになった。

二話　それぞれの道へ（一刀編）（後書き）

ぐだぐだになってしまいました……
申し訳ありません……
華琳達は次回一刀に真名を紹介します。
それと『誓名』の意味ですがそれも次回紹介します。
話しは変わりますが√を変えたのは一刀と終夜です。
これからは上手く出来るように頑張ります。
では、また次回です。
１０／１２華琳達の自己紹介の所を修正しました。

三話　覇王の理想（前篇）（前書き）

こんにちわ～
ちょっと予定変更で華琳達が一刀に真名を預けるのは後篇にします。
今回は前、中、後篇の三編成です。
では、始まり～

三話　覇王の理想（前篇）

「……」

俺が見ているのは城壁の下に広がる光景。
兵士は戦に使う弓矢を運び完全装備。

「俺達の居た時代なら絶対こんなことはあり得なかったよなぁ……
いや、でも、この光景は既に体験済みか……」

ここに居ると『あの頃』を思い出す……

「北郷、どうしたのだ？」

「ああ、夏候惇か。
いや、何でも無いさ……何でもな……」

「？」

彼女達は知らなくていいことだ……
俺達みたいな奴等のバカな物語なんてな……

「それよりお前、装備品と兵の確認の最終報告を曹操にしなくて良いのか？」

「一刀の言う通りね」

「か、華琳様！？」

声のした方を見るとそこには曹操と夏候淵が立っていた。
……俺、ちゃんと周囲を警戒してたのに気がつかなかった。

「数は揃っているの？」

「はい！北郷に声をかけられた為に報告が遅れました！」

こいつ俺の所為にしやがった……

「その一刀には糧食の最終点検の帳簿を受け取ってくるに伝えておいた筈だけど？」

「はい、受け取っておいたよ」

「以外と仕事出来るじゃない」

「常識範囲内だよ。それより……」

帳簿を私ながら俺はこう言った。

「ここには男嫌いが多いのか？」

「「「はぁ？」」」

やっぱりこう言う顔をされると思った……

「いやな、さっきの話なんだけどな。
さっき帳簿を取りに行った時に監督官に会った時に何と言うか……
監督官からものすごい罵倒をもらってさ……
それで『ここには男嫌が集まる所なんじゃないか？』とかそんなこ

とを思ってさ……
それで（以下略）」

「わ、分かったからやめなさい」

そう言われて俺は素直に愚痴をやめた。

「まぁ、良いんだけどさ」

「どうやったら、あれだけの言葉が出るのか不思議よ」

そう言いながら曹操は帳簿を開いて帳簿を読み始めた。
するとみるみる曹操の表情が険しくなっていく。
そして、読み終わり

「秋蘭、この監督官は何者？」

「はっ、先日士官してきた新人です。
仕事の手際が良いので今回の食料調達の担当を任せてみたのですが
何か問題でも？」

「ここに呼びなさい、大至急よ」

「は！」

何かあったのかねぇ……
まさか、ものすごく完璧だったとか？
それで曹操にスカウトされるとか？
それだったらすごいな……

しばらくして

「遅いわね……」

「遅いですなぁ……」

「気長に待とうぜ～」

日や雲を見る限りそんなに時間は経ってない筈なんだけど……

「……」

「……」

「……」

沈黙が痛い……さっきから曹操が殺気を放ってるんだ。

覇王の覇気がものすごく痛い……

「華琳様、連れて参りました」

あ、さっきの罵倒猫耳女だ。

「お前が食料の調達をしたのかしら？」

「はい、何か問題がありましたでしょうか？」

「指定した半分の量しか準備出来て無いのに問題が無いと思う？」

半分！？こいつ余程バカか！？曹操に首を刎ねられるぞ！

「このまま出撃したら行き倒れになる所だったわ。
そうなったらどうするつもりだったの？」

「いえ、そうはならない筈です」

成程……こいつ余程の天才か……
黙って見てようじゃないか、曹操に向かってどんなことを言うのか
……

「理由は三つあります」

「説明なさい。納得出来る理由なら許してあげるわ」

何か嫌な予感が……一応どんなことが起きても対応できるようにしておくか……

「一つ目は曹操様は慎重なお方故、必ずご自分の目で糧食の最終確認をいたします。
そこで問題があればこうして責任者を呼ぶ筈です。ですから生き倒れにはなりません」

おい、そんなことを言えば……

「馬鹿にしているの！？春蘭」

「はっ！」

やっぱりかよ……
夏候惇はそのまま剣を振り降ろしその少女を真っ二つに……

ガキンッ！

出来なかった。
夏候惇の剣は俺の瓶割刀に阻まれて少女に近づいていなかった。

「曹操、約束は？」

俺はいつもと変わらない声で聞いた。
覇気は纏わない様にただ普通の声で。
少女は俺が夏候惇の剣を受け止めたことに驚き過ぎているのか反応が出来ずにいた。

「そ、そうだったわね。次は？」

「は、はい。
二つ目は糧食が少なければ身軽になり輸送部隊の行軍速度が上がり討伐全体に
かかる時間が少なくなります」

ん？それって……

「秋蘭、行軍速度が上がっても移動する時間が短くなるだけではないのか？
討伐にかかる時間は半分にならない……よな？」

「ならないぞ」

「良かった、私の頭が悪くなったと思ったぞ」

あ～夏候惇、大丈夫だ。
それ以上悪くならないから。

「良かったな」

夏候淵、その台詞は口の端を吊り上げながら言うことじゃないぜ？

「三つ目は？」

「私の提案する策を採れば戦闘時間は更に短くなるでしょう。
よってこの量で充分だと判断しました」

おいおい……こいつとんでもない奴だな……

「曹操様！どうかこの荀？めを曹操様を勝利に導く軍師として
麾下にお加えくださいませ！」

！荀？だと！？『王佐の才』！？
まさかこんな天才と会えるとは……

「曹操、こいつは麾下に加えるべきだ」

俺は曹操に近づき曹操にしか聞こえない様に話す。

「一刀？」

「俺がこの時代よりもはるか先から来たと言うのは言ったよな？」

「ええ」

「荀？は俺達の時代で『王佐の才』と呼ばれている」

「つまり相当天才と言うことかしら？」

「間違い無い」

俺は曹操から離れてさっき俺が居た所に立つ。
若干二名がものすごい表情で俺を見てる……

「なら荀？、今回の討伐行を糧食半分で成功させなさい」

「御意！」

流石にあんまり人が死ぬのは見たくないからな……
何とかなったか……だけど……荀？は大丈夫なのか？
糧食半分とか絶対きついだろうに……
そんなことを思いながら俺は今から人を殺しに行く覚悟を決めた。

三話　覇王の理想（前篇）（後書き）

１０／１３日修正しました。

四話　覇王の理想（中編）

荀？を仲間に加えた後盗賊討伐の為に行軍していた。
しかし……

「俺の感覚だと今回の行軍速度は普通の行軍速度よりも少し早い程度だと思うんだけどな……」

糧食も半分しか無いからもう少し急ぐべきだと思うんだけど……
そう思っていると隣に居た夏候淵がこう返した。

「それは私も思うがそこは荀？の腕前しだいだろう」

「そうだろうけど……すごいことになったよなぁ」

「うむ……」

糧食を半分で終わらせるとか言って無茶がありすぎだよなぁ……
お？噂をすれば……

「お～い、荀？！」

「気安く話し掛けないでくれない？
耳が穢れるんだけど」

「口が悪いなぁ……
まぁ、そんなことは置いといて……
今回の一件大丈夫なのか？
糧食を半分で済ませるとか無茶にも程があると思うぞ？」

「別に平気よ。
曹操様の軍の討伐にかかる時間や
鍛練の精度を測った結果を元にして計算したんだから」
すげぇ……もしかしたら終夜と同等かも……いや、そんなことは……あるのかな？

「何よその変な顔は」

「何でもないって。
というかさっきのやり取りは肝が冷えたぞ。
な、夏候淵？」

「うむ、北郷の言う通りだ。
そもそも北郷が姉者の剣を受け止めなければ
今頃この場には居なかったぞ」

「あの脳筋があんなことをするって思う？
あんな脳筋が居なかったらもう少し安全にやれたわよ」
夏候惇には絶対聞かせたくない言葉だな……

「お前達、ここに居たのか」

「ひゃわっ！？」

やべぇ……思わず間の抜けた反応しちゃった……
夏候惇だから別に少し不思議に思うだけだよな？
大丈夫だよな？

「何だ？その間の抜けた反応は？」
「いや、何でもない。
ところで何かあったのか？」
何とか誤魔化せたか？
「ああ、お前達全員華琳様がお呼びだ付いてこい」
良し！何とか誤魔化せた！
馬鹿で良かった！
「分かった」
「うむ」
「了解」
そう返事をして俺達は夏候惇の後に付いて行った。
曹操の居る場所
「どうしたんだ？曹操」
「何でも前方に謎の集団が居るらしいのよ。
数は大したことは無いらしいけど……」
「ああ、成程。
それで偵察隊を出すかどうするか悩んでるだな」

「ええ、荀？、どうするべきかしら？」
「偵察隊を出しましょう。
夏候惇、北郷あなた達が指揮を執って」
夏候惇もかよ……
色々ヤバい様な気がする……
「待った、俺だけで良い」
「は？何を言ってるの？」
「もし盗賊だったら夏候惇は何も考えずに全滅させちまうぞ。
上手くやるから俺だけにしてくれ」
その言葉に荀？は納得が行ったのだろう。
言い直した。
「やはり北郷だけで行きなさい」
「しゅうぅらぁん、何だか馬鹿にされている様な気がするぞぉ」
「姉者はものすごく強いから偵察程度には出せないと言っているのさ。
「そうか！ならば良い！」
こいつ俺の予想以上にバカだ……
どうしようも出来ないほどにバカだ。

「……あぁ、姉者は可愛いなぁ」
ん？もしかして夏候淵って……シスコン？
マジかよ……
「一刀、早く行きなさい」
「あ、ああ」
取りあえず気にしないでおこう……
謎の集団の居る場所
「おりゃぁっ！」
ドゴォォンッ！
俺は今信じられない光景を見ている。
「うりゃぁっ！」
バァァッン！
だってそうだろう？
目の前にあんなに重たそうな持って盗賊らしき連中を倒してるんだぜ？
我が目を疑いたくなるだろ？
だが……

「はぁはぁ……数が多すぎるよぉ」
もう体力切れらしい。
それもそうだろう力がいくらあるとはいえ彼女は少女なんだ。
体力には限界がある。
「野郎共一斉に掛かれ！」
「っ！」
少女が顔を歪めた時俺は考える前に体が既に動いていた。
俺はまず瓶割刀を抜いて一番近くに居た男の首を刎ねた。
次にそれを見た仲間の男が襲い掛ってきたのでそれも刎ねた。
盗賊達は一斉に襲い掛って来るが俺はそれを気にせず一人づつ最小の動きで首を刎ねていく。
そして残り五人にまで減った時盗賊達は撤退を始めた。
「ふう……君大丈夫？」
「え、あ、はい」
「おい！」
俺は付いてきた兵士を呼んで指示を与えた。
「はっ！」
「撤退して行った兵士を追え！
もしかしたら敵の本拠地を割り出せるかもしれない！」

「はっ！」

さっきまで全滅させようかな？
って思ってたのは秘密だ。
瓶割刀を鞘にしまってさっきまで一人で戦ってた少女の方を向いた。

「なぁ、何で一人で戦ってたんだ？」

「それは……」

少女が説明しかけた時曹操達がやって来た。

「あ、ごめん、ちょっと待って。
曹操！こっちだ！」

「っ！」

ん？少女の顔が少し歪んだ様な気が……
気のせいか？

「一刀、謎の集団はどうしたの？」

「あいつ等は本拠地に逃げてったよ。
今追わせてるからすぐに本拠地が分かる筈だよ」

「あら、気が利くじゃない」

「褒めて頂いて恐縮だよ」

「あ、あなた……！」

何だ？殺気？
いや、そんな邪悪なもんじゃない……けど怒気は少なからずある。
俺はいつでも行動出来るように瓶割刀に手をかける。

「ん？この子は？」

「お姉さんもしかして国の軍隊……っ！？」

「ああそうだけど……っ！」

振り降ろされたのは少女の持っていた鉄球だった。
俺は何とか瓶割刀で防いでいた。
……瓶割刀じゃなかったら砕けてたかな？

「なっ！？貴様何を！？」

「国の軍隊なんか信用出来るか！
ボク達を守ってくれないくせに税金ばっかり持って行って！」

「だから君は一人で？」

「そうだよ！ボクが村で一番強いから邑の皆を守らないといけないんだ！」

くそ……本気を出せない……！

「だらぁぁっ！」

「っ！」

『不活一刀流』を背負うならこの少女を……！
でも……！
――――一刀……終夜をよろしくね……――――
あんなことはもう……！
「っ！」
「すきありぃぃぃっ！」
「っ！」
しまった……！やられる……！
「二人共、そこまでよ！」
「え？」
「剣を引きなさい！そこの娘も！一刀も！」
「は、はい！」
曹操の覇気にあてられて少女は鉄球をその場に落とした。
……地面陥没したけどどれぐらいあれ重いんだ？
「一刀、この子の名は？」
「聞いて無いな。

君、名前は？」

「き……許緒と言います」

こう言う威圧感のある相手を見るのは初めてなんだろうな。
許緒と名乗っていた少女は完全に曹操の空気に呑まれている。

「そう……」

そして次に曹操が取った行動は俺達を驚かせた。

「許緒、ごめんなさい」

「……え？」

曹操は許緒に頭を下げた。
その場に居た皆が曹操がそんなことをするとは思っていなかったのだろう。
全員呆然している。

「名乗るのが遅れたわね。私は曹操、山向こうの陳留の街で刺史をしている者よ」

「山向こうの……？あっ、それじゃっ！？ご、ごめんなさい！」

許緒は曹操が名乗るといきなり謝って来た。

「な……？」

「山向こうの刺史さまはすごく立派な方だって噂を聞いてます！

それなのにボク……！」

「構わないわ。今の国が腐敗しているのは刺史である私が良く知ってるもの。
官と聞いて許緒が憤るのは当たり前の話だわ」

流石曹孟徳だな……
覇王としての貫録がある。

「で、でも……きゃふっ！」

それから先を言おうとしていた許緒を頭を撫でることで黙らせた。

「曹操が良いって言ってるだろ？
どうしても謝りたいって言うんならその力を曹操に貸してやってくれよ」

「あのあなた……」

「ああ、俺は北郷一刀。
今は曹操に協力してる者だ。
好きに呼んでくれて良いよ。
それからさっきのことは気にしなくて良いよ」

「は、はい……」

「それと敬語も無しで良いよ」

「うん！」

誰が何て言おうと不安なんだろうな……
なら……

「曹操はいつか覇王になる。
その時になったら曹操は君の邑も守ってくれるんじゃないか？
なぁ？曹操」

俺がそう聞くと曹操は力強く頷いてこう言った。

「ええ、一刀の言う通りよ。
私は覇王になって大陸の皆が安心して暮らせる様にするわ」

「この大陸の……皆が……」

「曹操様！偵察が戻りました！
盗賊の本拠地はすぐそこです！」

「分かったわ。ねぇ、許緒」

「まずはあなたの邑を脅かす盗賊を根絶やしにする。
そこからで良いから力を貸してくれないかしら？」

「はい！」

許緒はその問いに力強く頷いた。

「許緒は取りあえず秋蘭と春蘭の下に付ける。
分からないことは教えてあげなさい」

「はっ」

「了解です！」

「では、総員、行軍を開始するわ！騎乗！」

「総員騎乗！騎乗っ！」

そして俺達は許緒の邑の盗賊を根絶やしにする為に行軍を再会した。

五話　覇王の理想（後編）

盗賊の本拠地は許緒と会った所からそんなに離れていない所にあった。
余程上手く探さないと絶対に見つからなかっただろう。

「敵の数は把握できているのかしら？」

曹操がそう聞くと夏候淵が答える。

「はい、およそ三千と報告がありました」

連れてきた戦力は千と少しだから盗賊達はその三倍の戦力だ。
だが、荀？は別に大したことではないという様な表情でこう言った。

「連中は統率力も無く訓練もされていませんから我々の敵ではありません」

「けれど策はあるのでしょう？糧食の件、忘れていないわよ？」

「無論です」

すごい自信だな。
ま、あの荀文若だからそれも当然か。

「説明なさい」

「まず、曹操様は少数の兵を率い、砦の正面に展開してください。
その間に夏候淵、夏候惇の両名は残りの兵を率いて後の崖に待機。

本隊が銅鑼を鳴らし攻撃の準備を匂わせれば敵は必ず外に出てくるでしょう。
その後曹操様は兵を退いて充分に引き離したところで夏候淵と夏候淵の両名で敵を叩きます」
ん？それってまさか……
「それはまさか、華琳様を囮にしろと言う訳か！」
やっぱりそうなるよな？
荀？も夏候惇が反対するのは予想済みって顔だし。
しょうがない……なら納得してもらうか。
「なら夏候惇が曹操を守れば良いだろう？
俺と夏候淵で敵を叩こう」
「ちょっと！何勝手なこと……！」
俺は夏候惇に聞こえない様に小声でこう言った。
「良く考えろ……夏候惇が丁度良い時期に攻められると思うか？
敵を見た瞬間に突っ込むのが目に見えてるだろうが。
俺なら丁度良い時期を見つけて攻めるから俺に攻める役をやらせろ」
すると、荀？は納得した顔で頷いた。
「やはり、敵を叩く役は北郷と夏候淵にやらせます。
護衛は許緒と夏候惇が」
「よし！許緒！全力で華琳様をお守りするぞ！」

「は～い」

そうして荀？の策の下戦が行われることになったのだが……

「あれ？曹操達が下がるのが思ってたのより早いな」

そう、俺が思っていたのよりも曹操達が下がって来るのが早かった。
何があったのだろう？

「華琳様達は無事の様だな。
姉者も無事の様だ」

夏候淵はそう言うと安堵の表情を浮かべる。

「良かったな」

「うむ」

そして、しばらく経って……

「北郷、敵の殿だ。
そろそろ攻めるぞ」

「了解」

俺は刀を抜いてそう返事をした。

「夏候淵隊！撃ち方用意！」

夏候淵の隊の兵士は弓をつがえて……

「敵中央に向けて、一斉射撃！撃てぃっ！」

矢を放った。

それにより敵の兵士に動揺が走る。

俺はそれを見て敵に襲い掛る準備をする。

「夏候淵、援護は頼むぞ」

「良かろう。

行け！」

それを聞いて俺は敵に襲い掛った。

さぁ、『不活一刀流』の真髄を獣達に見せてやろう……

第三者ｓｉｄｅ

一刀は一振りで確実に敵の数を減らしていく。

その姿は敵味方限らずすらこう思わせていた。

『恐ろしい』

と。

敵は恐れ慄き、味方は一刀が敵で無かったことを安堵する。

敵は一刀から逃げるように撤退していく。

それは正しい判断だろう。

もし、逃げずに一刀に挑むのであれば……

その死骸は本当に生き物であったのか疑う程酷い物になっていただろう。

「あれが、北郷なのか？」

夏候惇は剣を振いながら一刀の姿を見ていた。
本来ならばそんな暇は無いが敵は大半が逃げ去っていた。
この戦場において未だ戦う意思を持っているのはほぼ居ない。
そして、遂に一刀の周りには『人』が居なくなった。
それを確認した一刀はゆっくりと刀を鞘にしまいゆっくりと曹操達の居る方へと近づいた。

「皆大丈夫か？」

曹操達に近づいた一刀が一番に言った言葉は曹操達を心配する言葉だった。
その言葉を聞いてまず一番に反応したのは曹操。

「え、ええ。ご苦労さま」

次に夏候惇。

「北郷、お前、相当強いな」

次に夏候淵。

「うむ、もしかしたら姉者以上かもしれん」

次に許緒。

「お兄ちゃんすごいよ！」

次に荀？。

「死ねば良かったのに……」

そんな五人の言葉を聞いて一刀は微笑む。

すると……

「「「「「／／／／／／」」」」」

『朴念仁の微笑み』（矢吹命名）によって五人は陥没した。

それに天然鈍感種馬の一刀が気付く訳もなく……

「あれ？皆どうしたの？」

そう言った。

五人が取る反応は勿論……

「「「「「はぁ……」」」」」

溜め息をついた。

何故一刀は溜め息をつかれたのか分からなかったが一刀は首を傾げながらこう言った。

「なぁ、一つ頼みがあるんだけど」

「何かしら？」

「俺、正式に君達に士官したいんだ」

「何故？」

曹操がそう聞くと一刀はこう答えた。

「君達の理想を見て支えてみたいと思った。
許緒に頭を下げた時、俺は君こそが覇王に相応しいと思ったんだ」

「そう……ならば良いでしょう。
北郷一刀、私の手足となりなさい」

一刀はその言葉を聞いて臣下の礼をとった。

「御意。
あなた覇道を妨げる全ての障害を取り除きましょう」

「一刀、あなたの真名を聞きたいのだけど……
あなたの居た所にも真名はあったのかしら？」

「いえ、ありませんでした。
ですがそれに当たる物はあります。
『誓名』と言う名で、その者の誓を示す物です。
我が誓名は『和刀』と申します。
和を守る刀そして、乱世にある世界を和へと導く刀です」

「そう、あなたの誓名とやらを預かりましょう」

「それともう一つお願いがあります」

「聞きましょう」

「誓名は簡単に表に出していけない物なのです。
故に余程のことが無い限り誓名で私のことを呼ばないでください」

「良いでしょう」

そうして一刀は覇王曹孟徳の部下となった。
彼女を覇王にするという誓の下に……

拠点話　一刀篇Ｐａｒｔ１

何でこんなことになったんだろう……
俺は今春蘭（誓名を華琳に預けた後に皆預けてくれた）と対峙している。
ことの始まりは俺が適当に城の中を歩いていた時に春蘭に話しかけられた

「一度私と仕合え！」

何ともまぁ……春蘭らしい言葉で……
俺も鍛練したかったし承諾した。
ここで承諾したのがいけなかった……
彼女はあの『夏候惇』だぜ？
俺もまぁ……何と言うか……だけど！
あの『魏武の大剣』と戦うとか真面目にヤバイ。
本能が危険信号を発してるぜ！

「行くぞ、北郷！」

はい、処刑宣告～
しょうがない……俺も死にたくないしなぁ……
久しぶりに真面目にやるか……

「ああ、来い……夏候元譲！」

「っ！」

一瞬だけ春蘭は俺の覇気に怯んだ様な顔をしたがすぐに顔を引き締

める。
そして俺に全力で襲い掛る。
その一撃はまさしく大剣を持つ者に相応しい一撃。
かわすことは出来るがその威力は地面に穴を開ける程の一撃。
先程まで俺が居た所には穴が開いていた。

「（こいつ……全力でやりやがった……！
でも……久々だ……最近矢吹達ともやってなかったからな……
楽しめそうだ……）」

「だらぁっ！」

「ふっ！」

ガキンッ！

「北郷！中々やるじゃないか！」

「そっちこそ！」

ガキンッ！ガンッ！ガンッ！ガンッ！

「そろそろ私は本気を出させてもらうぞ」

「っ！」

あんな馬鹿力でも本気じゃないのかよ……
でも……そろそろ俺も準備完了だ。
鈍ってた体も解れてきた。

「だらぁっ！」

春蘭の本気の一撃が俺に襲い掛って来る。
俺は瓶割刀を鞘にしまう。
そして……

「不活一刀流……抜刀術……『殺鬼』！」

『殺鬼』……それは有無も言わさず鬼を殺す為に創られた必殺の一撃。
その技は決まったら鬼を一刀両断する。

「ぐはぁっ！」

流石に殺す訳にはいかないから勿論峰打ちだ。
抜刀術で峰打ちは結構難しかった。

「春蘭に勝つなんてすごいわね、一刀」

「か、華琳様！？」

「本当に良い勝負だったよ！兄ちゃん！」

「絶対に偶々よ！」

「うむ、北郷も中々やるじゃないか」

やっぱり姉妹だな。
同じこと言ってるよ。

「北郷もう一度仕合え！今のは油断した！」

「え……」

「『え……』ではない！早く構えろ！
華琳様！今すぐこやつに勝って見せます！」

「そう、期待しているわ」

ちょ、そんなこと言ったら……春蘭は……

「はい！」

やっぱり……
火が付いちゃったか……

「分かったよ……一度だけだよ？」

「その一度で勝ってやる……！」

その後一度と言わず十回程やって春蘭が泣いて『もう仕合たくない！』とか言うまで俺はずっと
付き合わされた……

六話　それぞれの道へ（矢吹篇）

「つっ……」

体中が痛てぇな……

何だか高い所から落ちた時みたいだ……

「ここはど……こ……」

目の前を見たらとんでもない光景だった。

「完璧な荒野だ……」

日本にこんな所は無いだろってぐらいの荒野。

「拉致でされたか？」

もっと慌てるべきなんだろうが慌てても何にもならない。

ここは冷静になって考えるべきだ。

「俺の名前は古城矢吹……聖フランチェスカ学院二年……部活は所属していない……

上から鉄骨が落ちて来て……そこで意識が無くなった」

ここに来た経緯以外の記憶の欠落は無い。

記憶喪失って訳じゃなさそうだ。

「他に何か変わったことは……」

俺はそう思って自分の周りを見る。
すると、近くに一振りの刀が落ちているのが目に入る。
「これまさか……『童子切』か！？」
『童子切』とは清和源氏の嫡流である源頼光が、丹波国大江山に住み着いた鬼・酒呑童子の首をこの刀で切り落としたという逸話を持つ刀だ。この刀は確か俺の祖父が気に言って東京国立博物館から買い取って（奪い取ったとも言う）本家に保管されている筈だが……
「何でここに……」
俺はそう思いながら鞘から童子切を抜く。
「人はあんまり殺したくは無いんだがな……」
自分の身を守る物は持っておいた方が良い。
無手でもそれなりには戦えるがやはり不安要素は残る。
俺は近くの岩に近づいて抜刀術の構えをとる。
そして……
「はぁっ！」
抜刀術は上手く行った。
岩は俺が斬った所から上が音を立てて崩れ去った。
「ふぅ……」
俺が抜刀術をした理由は二つ。
一つはこの刀の調子を見る為。

抜刀術を見る限りこの刀の調子は抜群。
二つ目は俺が斬った岩とは違う岩の後で隠れている奴等に警告するためだ。

「いつまでも隠れてんな。
あんた等が何かしない限り俺は何もしない。安心して出て来い」

その警告から少しして岩から三人の少女が出て来た。
変な服を着ているがまぁ、そこら辺は気にしない。
問題なのは三人の内二人が相当のやり手だってことだ。

「俺は古城矢吹。あんた等何者だ？」

出来る限り敵意を含めないで聞いたが三人の少女達は未だ警戒を緩めていない。
すると、三人の中でもしっかりしている少女が名乗り出た。

「私は姓を『関』名を『羽』字を『雲長』幽州の偃月刀とは私のことだ」

「……は？」

ふざけてるようには見えないし……まさか、タイムスリップか？
だとしたら俺はこの時代に連れて来た神を恨みたいな……
俺はこの時代には絶対に来たくは無かったのに……
って、ちょっと待てよ……確か関羽は男だったような……
じゃぁ、これはタイムスリップじゃなくてパラレルワールドに来たのか？

「どうしたのだ？」

「な、何でも無い。大丈夫だ」
ここから迂闊には横文字とか使わないようにしないとな。
意味分からないだろうし。
「鈴々は姓を『張』名を『飛』字を『翼徳』なのだ！」
この子が張飛？
マジか……
何でもありだな……
パラレルワールドって……
「私は姓『劉』名を『備』字を『玄徳』と言います」
「！」
この子が劉備か……
成程な……
「あの聞きたいことがあるんですけど……」
「ああ、良いぞ」
「あなたが天の御遣いですか？」
「何それ？」
天の御遣いとかめちゃくちゃ胡散臭過ぎるだろう。
そう思って聞いた。

すると……

ぎゅるるるるるっ

「あはははは～」

張飛のお腹の虫が盛大に鳴った。

「どうやら張飛がお腹減ってるようだし近くの街に移動しようか？」

「そうだな……」

関羽さん……あんまり呆れたような顔をしてやるなよ……張飛が可哀想だよ……

街の酒家

「成程な……」

街の酒家で昼食を取りながら大体の事情を説明してもらった。
官の腐敗していたり盗賊達が民から食料を奪っていたり飢饉の兆候が見え始めたりと……
もう、救いようのない乱世だった所に管輅とか言う占い師が天の御遣いが乱世を鎮めるとか言う占いをしたらしい。

「確かに俺はこの世界の住人じゃないからな。
だから、もしかしたらお前達が求めてる天の御遣いかもな」

「なら……！」

「一つ！一つだけ聞かせろ」
「はい？」
これは重要な質問だ。
もし答えが俺の納得出来る物で無かったら俺は絶対に協力しない。
「お前の理想って何だ？」
「私の理想は大陸中の皆が笑顔でいられることです」
「それはただの『甘い理想です』え？」
「私はそれでもその理想を掲げていきます。
ついて来てくれた人達を裏切らない様に」
その目はとても強い目だった。
それ以上その理想は甘いとは言わせないような……
「そうか……
なら協力しよう。
天の御遣いとしてな」
「ありがとうございます！」
「これからもよろしくお願いします！」
「よろしくなのだ！」
「さてと！そろそろ行くとするか！」

そう言って俺は立ち上がる。

「うん！ごちそうさま！」

え？

「ごちそうさまでした！」

はい？

「ごちそうさまなのだ！」

まさか……

「会計俺？」

「「「はい（なのだ）！」」」

うっそ……

マジかよ……

「あのなぁ……」

俺は女将に聞こえない様に三人を集めて小声で言う。

「俺はこの世界に来たばっかりなんだぞ……

金なんてある訳無いだろうが……」

「え！嘘！？」

「しっ！声がでかい！」
「ですがどうするのですか？」
「どうするか……」
俺はそう言いながらポケットに手を入れる。
すると手に違和感を感じてポケットから手を出してみる。
「そういえば……！」
俺の人差し指には二つの指輪があった。
「そうだ！これがあったんだ！」
「「「？」」」
「関羽、これを売ってきてくれ！」
そう言って指輪を渡す。
関羽は少しの間その指輪を見ていたが店を出て指輪を売りに行った。
「ご主人様、あの指輪は？」
「少しな……」
あの指輪は古城家次期党首の証だ。
俺が十歳の頃に祖父から渡された。

「ってかご主人様って何だ？」

「え？私達のご主人様だからご主人様って呼んでるんだよ？」

「どういう理屈だ……」

俺がそう呟いてから少しして関羽は帰って来て会計を済ませると女将が『あんた等の理想に心うたれたからこれを持ってきな！』と言って酒を渡してくれた。

桃園

「綺麗だなぁ……」

周りは桃の花。
桜みたいで本当に綺麗だ……
あの時……俺達も……

――――いつまでも桃の花を見ていられる時代を創りたいわね……
――――

「……萌琳（ほうりん）」

彼女の名前を思わず呟いてしまったことに気が付き俺は首を横に振る。
彼女はもう居ないんだ。
いつまでもくよくよしてはいられない。

「酒なのだーーー！」

「こら！鈴々！いい加減にしろ！」
「？あの子の名前って張飛だろ？」
「あれ？天の世界には真名は無かったの？」
「真名？」
知らない言葉に首を傾げると関羽が説明してくれた。
「真名と言うのは家族や親しい者にしか許さない名です。
その者の生きざまを示す物です」
「へ～なら俺もそれに等しい物持ってるな。
でも、簡単には呼ばせられないけど他人に教えることだけでその者を認めてるってことになる物だ」
「ねぇ、ご主人様。
私達のことを真名で呼んで？」
「ああ、分かった」
「じゃぁ、私の真名は桃香！」
「私の真名は愛紗と申します」
「鈴々の真名は鈴々なのだ！」
「俺は守風ってのがこの世界で言う真名に当たるかな？
よろしく。でも、絶対に呼ぶなよ？」

「「「うん（はい）（なのだ）！」」」

俺は三人が頷いたのを見て少し考える。
こうして真名を教え合い互いを認め合って更にここは美しい桃園なのだから
桃園の誓をするべきではないかと。
その考えに至って俺は三人にこう言った。

「結盟しようぜ。
民の為に乱世を鎮めるって」

「「「うん（はい）（なのだ）！」」」

三人は各々の盃をお掲げた。
俺もそれに続く。

「我等四人！」

「姓は違えども、姉妹の契りを結びしらは！」

「心を同じくして救い合い、皆で力無き人々を救うのだ！」

「同年、同月、同日に生まれることを得ずとも！」

ここは本当は劉備であるが言うべき所だが桃香が俺に目で伝えて来たので俺が言う。

「願わくば、同年、同月、同日に死せんことを！」

有名な桃園の誓が俺を含まれて行われた……
そのことを胸に刻み俺と姉妹三人の乱世を鎮める物語が今、ここに始まった……

七話　公孫賛の元へ

俺は今公孫賛の城の玉座の間に居る。
ん？『描写を端折り過ぎだ』だって？
それもそうだな。
まず、桃園の誓をした後どこに行くかって話になったんだ。
そうしたら桃香が『この辺りの太守が私の友達なの！』って言ってとりあえず。
その友達の所、つまりここに来ることになったんだ。
そこで手ぶらで行くと足元を見られるから指輪を売って店の会計に使わなかった分を使って
兵隊人達を百人程連れてこの城に来て今に至る。
そして、肝心の桃香だが……

「白蓮ちゃん～！それでね～！」

「あはははは！中々充実した毎日を過ごしてたんだな！」

かつての知り合いとの再会を喜んでいた。
ホント……こう言うのは喜んでやるべきかもしれないんだけど話が出来ないしな……
でも、邪魔するのは何て言うか……
そんなことを考えていると柱の後から一人の少女がやってきた。

「伯珪殿、そろそろ本題に入られては如何か？
そちらの御人が本題に入れずに困惑しております」

あの少女なかなか出来るな……
生粋の武人って言う奴か。

「ああ、そうだな。
すまなかったな。
私は姓を『公孫』名を『賛』字を『伯珪』と言う。
よろしく頼む」

「私は姓を『関』名を『羽』字を『雲長』」

「鈴々は姓を『張』名を『飛』字を『翼徳』なのだ！」

「俺は古城矢吹。
天の御遣いだとか言うもんに成り行きでなったもんだ」

「はぁ？天の御遣いって管輅の予言だろ？
与太話じゃないのか？」

「ああ、それでも俺は天の御遣いって言う『役』を演じることになったのさ」

「？」

あ、こいつ駄目だ。
これで意味分からないとかこの乱世生きていけないわ。

「伯珪殿、この御人は劉備殿を助けるこの四人の手助けをする為に天の御遣いと言う名を使うことにしたのですよ。
時に古城殿」

「何だ？」

「あなたは北郷一刀殿と言う方と知り合いですか？」
え？今こいつ……何て……？
「一刀って言ったのか？」
「はい。
それが何か『どこであった！？』？！」
「どこであいつと会った！？
あいつは元気だったか！？」
「お、落ち着きくだされ！
北郷殿は見た限りお元気でした！
北郷殿とは陳留の郊外で出会いました！」
おっと、つい、感情的になってしまったか。
「悪いな。
一刀は俺と親友なんだ。
色々あって離れ離れになっちまってな。
それで感情的になったんだ」
「そうですか。
手掛かりが合って良かったですね」
「ああ」
あれ？本題から凄く遠のいてるな……
どう修正しよう……

「ところで桃香」

「何？白蓮ちゃん？」

「本当の兵士は何人居るんだ？」

おっつ～？
ばれてる～……
ここは正直に言うべきか……

「すまん……本当の兵士は居ないんだ。
でも、全力で仕事するからここに置いてくれ！」

「あ、ああ。
ここは人手が足りないからむしろ歓迎するよ。
よろしく頼む」

っしゃぁぁぁぁっ！
首がつながった！
これで駄目だとか言われたらどうしようかと思ったぜ……
さて、一刀がこの世界に来てるなら終夜も来てるだろうな……
一刀……終夜……お前等どうしてるんだ？
俺はそう心の中で二人に尋ねた。

八話　大徳を持つ者達の初陣（前篇）

侍女に連れられて来て見たのは城門の傍に居る武装した兵士。
その光景を見て今から戦をすることを予感させた。

「……どうしても思い出しちまうな」

俺は頭を横に降ってあいつのことを頭から追い出す。
変なことを考えていたら負けるのが目に見えている。

「すごーい！これ全部白蓮ちゃんの兵隊さんなの？」

「ああ、でも、半分は義勇軍半分だけどな」

それだけ義勇軍が集まったと言うことはそれだけ大陸の情緒が乱れ
大陸の人達が危機感を
感じていると言うことだろう。
この大陸はどうなることやら……

「古城、お前達は左翼の部隊を率いてくれ」

「あ？分かった」

こいつ随分剛毅だな。
それだけ信用されてるってことかな。

「じゃぁ、口上に行ってくる」

「頑張ってね、白蓮ちゃん」

「ああ！」

公孫賛は軍の先頭に立って口上を始めた。

「諸君！いよいよ出陣の時が来た！
今まで幾度となく退治してきた盗賊共！
今日こそ殲滅してくれよう！
公孫の勇者よ！今こそ功名の好機ぞ！
各々存分に手柄をたてい！」

「うぉぉぉぉぉぉっ！」

大地を揺るがす鬨の声を聞いていた公孫賛が

「出陣だ！」

出陣の号令を出した。

意気揚々と城門から出発する兵士と共に俺達も隊を率いて出陣する。
すると桃香が心配そうな顔でこう聞いてきた。

「ご主人様、天の世界に戦はあった？」

「無かったぞでもな……」

無かったことには無かったが……

「戦は初めてじゃない」

「え？」

桃香は意味が分かっていないらしい。

まぁ、それはそうだろうな。

「いつか話すさ」

俺としては絶対に話したくないけど……

そんなことを思っていると

「全軍停止！これより我が軍は鶴翼の陣を敷く！

各員粛々と移動せよ！」

本陣からの伝令が命令を伝えながら前線に向かって走って行った。

「兵の指揮は俺と……愛紗に任せて良いか？」

鈴々を選ぼうとしたけどなんかなぁ……

「はっ！お任せください！」

「鈴々は？」

「桃香を守っててくれ」

「分かったのだ」

あれ？鈴々は『そんなの嫌なのだ！』とか言う子だと思ってたんだけどな……

まぁ、良いか。
今は兵の士気を上げ無いと。

「聞け！劉備隊の兵どもよ！敵は組織化もされていない雑兵共だ！この戦で負けることは許されない！負ければお前達の守りたい者は盗賊の好きにされてしまう！守りたくば盗賊共に勝て！そして生き残れ！」

「うぉぉぉぉぉぉっ！」

「全軍戦闘態勢を取れ！」

愛紗の号令と共に兵士達が抜刀する。
俺も童子切を抜刀する。
そして……

「盗賊達が突出してきました！」

緊迫した面持ちの伝令が本陣に向かって疾走して行った。

「古城隊、行くぞ！」

「関羽隊！我等も行くぞ！
全軍突撃ぃぃぃぃぃぃっ！」

そして俺達の戦が始まった。

九話　大徳を持つ者達の初陣（後編）

今は戦の後。
愛紗の活躍があって敵はどんどん倒されていった。
一方俺はと言うと……

「ご主人様すごかったね～敵をどんどん倒して」

桃香はそう言ってくれているが実は違う。

「そんなこと無いって。
殆んど愛紗の活躍だったから」

そう、殆んど愛紗が敵を倒して活躍の場なんて全く無かった。

「いえ、ご主人様の武に比べ私の武など足元にも及ばないでしょう」

彼の関雲長にそう言われると何だかくすぐったい。
すると趙雲が俺を見ているのに気付き話しかける。

「さっきから俺を見てどうしたんだ？」

「いえ、あなたと一度手合わせしてみたいと思いまして」

「え！？」

まじかよ……彼の趙子龍と戦うなんて出来る訳無いだろうが……
何とかしないと……

「俺は絶対に戦いたく無いな」
ストレートにズバッと言えば大丈夫……の筈だ。
「そう言わずに」
駄目だったぁぁぁぁっ！
この戦闘狂め！
「何か失礼なことを思いましたかな？」
「思ってねぇよ」
ったく……
勝手に心を読みやがって……
「それより趙雲殿。
最近おかしいとは思わないか？」
愛紗のその言葉を聞いて趙雲の纏っている雰囲気が変わった。
「確かに、最近匪賊共の動きが活発化している」
「そうだったら飢饉も起こるだろうな」
「収穫した食べ物が奪われちゃうんだから飢饉が起きるのは当たり前なのだ」
「それと共に国境周辺で五胡の影もちらついている。
何かが起ころうとしているのは確かだな」

三人の言葉をまとめるとこれから大きな動乱に繋がると言うことだ。
無論そうなるだろう。
これから様々な波が流れる。
相当大きな波が……
そんな中で俺達はどうやって立って行くのか。
それが一番重要なことだ。
俺はそんなことを思いながら蒼い、それでいて不気味な空を見上げた。

拠点話　矢吹篇Ｐａｒｔ１

「おらぁっ！」

「くっ！」

俺は今趙雲と仕合している。
事の始まりは二時間前だ。
いきなり趙雲が部屋に来たと思うと
『古城殿！仕合して頂きたい！』と抜かしてきて二時間程説得を試みたが失敗。
結局今に至る。
因みにギャラリーは桃園組全員と若干影が薄い普通の人。

「影が薄いとか言うなーーーー！」

今聞こえた事は無視しよう。
まぁ、そんな訳で戦っている訳だ。
状況としては俺が有利だ。

「はぁっ！」

「甘い！」

確かに趙雲の槍の速さは厄介だ。
それでも……

「軽い！」

「ぬぐっ！」

厄介なのは速さだけ。
何とか受ければ後は弾ける！
俺は趙雲の槍の先の開いている部分に刀を挟み思いっきり手首を捻る。
すると槍が傾き趙雲は体のバランスを崩す。

「むっ！」

俺は素早くで刀を趙雲の槍の先から抜いて趙雲に突きつける。

「俺の勝ちだ」

「負けました……」

俺は童子切を鞘にしまい皆の所に近づく。

「ご主人様すごいよ！」

と、桃香。

「素晴らしい武でした」

と、愛紗。

「お兄ちゃん！今すぐ鈴々と仕合うのだ」

と、鈴々。

「いや～まさか、勝てるなんて思わなかったぜ。
途中何回もひやひやした～」
俺はそう言いながらテーブルに突っ伏した。
本当に疲れた……
「古城殿、私の真名をあなたにお預けしましょう」
「あ？良いのか？」
「ええ、あなた程の武を持つお方なら構いません」
「なら、俺も教えるかな。
つっても俺の場合――――――説明中――――――ってことだからな」
「分かりました。
私の真名は『星』と申します」
「俺の誓名は守風だ」
俺はそう言って手を前に差し出す。
星はその手を強く握った。
「真名を交換したところで古城殿。
もう一度仕合いましょう」
恐るべし……戦闘狂。
「分かった……もう一度だけだぞ」

そして俺はもう一度仕合うことになったのだがその後愛紗や鈴々と仕合うことになり最終的には
三人同時に仕合伸ばしてしまい次の戦では俺一人で三人の部隊を俺が率いることになってしまったのは余談である。

十話　それぞれの道へ（終夜編）

「くっ……」

身体中が痛い……
高い所から落ちたのだろうか？

「ここは……どこだ？」

目を開けると完全な荒野。
俺の記憶では日本にこのような所は無い。

「拉致でもされたか？」

そう考えて首を横に振る。
上から鉄骨が落ちて来たのだ。
拉致なんてされる訳が無い。
普通ならば俺達は原型も留めていない程に残酷な骸になっているだろう。
では何故俺はここに居る？
一刀と矢吹はここに居ないようだがあの二人はそう簡単に死ぬような奴らでは無いだろう。

「俺の名前は潺終夜（せせらぎ）……聖フランチェスカ学院二年……部活は所属していない……
上から鉄骨が落ちて来て……そこで意識が無くなった」

ここに来た経緯以外の記憶の欠落は無い。
記憶喪失と言う訳では無さそうだな。

他に何か変わったことは……」

俺はそう思い自分の周りを見る。

すると、近くに一振りの刀が落ちているのが目に入る。

「これまさか……『大包平』！？」

大包平（おおかねひら）は、平安時代の古備前派の刀工包平作の日本刀（太刀）。国宝に指定されている。日本刀の最高傑作として知られ、童子切安綱と並び称されて「日本刀の東西の両横綱」と例えられることもある刀だ。

俺の祖父が気に行ったとか言って買い取った。（矢吹の家とは違いきちんと買い取った）

「何故ここに……」

本家に保管されていた筈だが……

それに俺は事故にあう直前にこんな物は持っていなかった筈だ。

「ふむ……む？」

悩んでいると向うから二人の女が歩いてきた。

「隠れた方が良いか」

ここがどこか分からない以上面倒なことになる可能性がある。

そう思って近くの岩に身を隠す。

そして先程俺が居た場所の近くに二人の女性が現れた。

「最近いい加減に袁術に使われるのも疲れてきたわね」
袁術？確か三国志の登場人物だったな。
三国志関係の映画の撮影だろうか？
俺がそんなことを思っている間にも二人の話は続いて行く。
「そう言えば策殿、こんな占いを知っておるか？」
さく？サク？もしかして策か？ならばあの女性は孫策か。
ということはもう一人の女性が黄蓋か周瑜だろうか？
「何々？」
「天の御遣いが黒点を切り裂き流星に乗って現れる天の御遣いがこの大陸の乱世を鎮めると言う占いじゃ」
む？三国志や三国志演義にそんな者は登場していなかった筈だが？
それに今気付いたが孫策は男の筈だ。
なのに策殿と呼ばれているのは女性……もう少し様子を見るか。
「まぁ、そんな話でも私達の独立の切欠になってくれたら嬉しいんだけどね」
もし、本当にこの時代が三国志の時代ならば神を恨むしかないだろう。
だが、今更恨んでも遅いだろう。
「ぐっ！」
少し動いた所為で身体中に痛みが走った。

その所為で少し声が出てしまった。
その声が聞こえていたらしい。
孫策らしき女が剣を抜いて叫んだ。

「誰！？」

俺は仕方なく岩の後から出る。

「あなた誰？」

このままで俺の命が危ない。
そう思った俺は大包平を抜いて構える。
それを見た孫策らしき女性も剣を構えた。

「祭、この子相当やる子よ。
手は出さないで」

「承知……」

そう返事をして祭と呼ばれた女性は孫策らしき女性から少し離れた。
俺はそれを見て孫策らしき女性に襲い掛る。

「くっ！」

ガキンッ！

孫策らしき女性は何とかそれを防ぐ。
俺は孫策らしき女性から少し距離をとる。

「っ！」

全身に痛みが走り俺は立てなくなった。
ここまでか……
だが、女性は俺に斬りかかって来ない。
「あなた、怪我をしてるの？」
「ああ、高い所から落ちたのか全身ボロボロだ」
お互いに警戒しながら喋る。
立てなくなったとは言え刀を振るくらいは出来る筈だ。
そんなことを思っていると女性が剣を鞘にしまいこう言った。
「あなた『天の御遣い』を演じない？」
「は？」
孫策の城の一室
「大体の事情は把握した」
簡単にまとめればこうなる。
孫策の母親は戦で死に彼女達は力を失った。
そして今は袁術の客将として伏する龍として天に飛ぶ時を待っているらしい。
そんな時管輅が『天の御遣いが乱世を鎮める』と言う占いをしたらしい。
「俺が生きていくにはどうやらその天の御遣いを演じなくてはいけないだろう」

この大陸で生きていく術は俺には無い。
だからこそ受けた方が良い。

「なら？」

「ああ、天の御遣いを演じる。
それより今日はもう寝て良いか？
正直こうやって喋っていることが辛いんだ」

さっき刀を振っていたがそれは気力で頑張っていた。
寝れるならば寝るに限る。

「良いわよ。
その代り明日は尋問があるからね」

「ああ、構わない」

俺はそう返事をして目を瞑り意識を手放した。

十話　それぞれの道へ（終夜編）（後書き）

流石に短いので修正しました。

十一話　尋問（前書き）

こんにちわ～
今回は台詞が多いです。
地の文が少ないです。
本当にごめんなさい……
では、始まり～

十一話　尋問

俺は今尋問をされる為中庭に居る。
中庭で行う理由は恐らく盗み聞きをしている奴が良く見えるからだろう。
まぁ、それ程あいつ等も大変だと言うことか……
そんなことを考えていると孫策と黄蓋が二人の女性を連れて来た。
一人は呑気そうで良く分からん女性。
もう一人は……なっ！

「ほう…りん……？」

俺はそう呟いて首を横に振る。
いくら似ていても彼女じゃない。
彼女な訳が無いんだ。
俺がそんなことを考えていると孫策が手を振って来た。
俺も一応手を振り返す。

「もう怪我は大丈夫？」

「一日やそこらでは治る怪我で無い。
昨日よりはまだマシだがな」

「そう、それより紹介するわね。
あなたの尋問を担当する陸孫と周瑜よ」

「よろしくお願いします～」

何だか呑気な声だな。

これが本当にあの有名な軍師か？

「周瑜だ、よろしく頼む」

あの美周郎か。

成程。

「潺終夜（せせらぎ）だ。

お前達への協力は惜しまない。

よろしく頼む」

「それも尋問しだいだがな」

確かに生き残れるか首を刎ねられるかは俺次第だろう。

だが

「生き残れるさ。

俺にはその自信がある」

「ほう？ならばその根拠を教えてもらおうか」

俺は周瑜に言われ生き残れる根拠を話し始める。

「お前達は袁術から独立したいと思っているだろう？

その為には力が欲しい筈だ。

無論俺を妖として斬り捨てて名誉を上げるのも良いだろう。

だが、例えそれをしたとしても袁術がお前達の領土を返還する筈が無い。

お前達を利用し尽くすだけだ。

もし袁術を倒して独立出来たとしても乱世の中でお前達が生き残れ

るかどうかは分からない。
ならば、怪我をしながらも孫策とやり合えた俺を仲間にして確立を少しでも上げた方が良い筈だ。
何せ天の御遣いとか言うのはあと二人居る筈だからな」

「何だと？」

「天の国で俺が消えた状況下ではもう二人仲間が居たんだ。
だから、あいつ等もこちらに来ていると思った方が良い。
それに天の国と言うのはこの時代から千年後以上も先の世界だ。
だからこれからどうなるかと言うのは知っている」

「何と……では、後の二人も？」

「ああ、だからお前達は簡単に倒せる」

俺がそう言うと周瑜は思案顔になった。
そしてしばらくして

「分かった。
完全には信用できないが私達はお前を利用しよう」

「良いさ。俺もお前達を利用する。
生きる為にな」

俺がそう言って笑うと周瑜も少し笑った。
すると

「ねぇ～終わった？」

「長ったるしい尋問は終わったか？」
孫策と黄蓋が酒を飲んでいた。
陸孫は引き攣った笑みを浮かべている。
「周瑜……」
「何だ？潺」
「お前も苦労しているんだな」
「……分かってくれるか」
「ああ」
昔不良に絡まれた時に一刀と矢吹は不良の悪口を言って不良を刺激した。
その時結局は俺達は戦うことになり警察に連行された。
「少し苦労している同士話さないか？」
「そうだな……」
その後俺と周瑜の間で『苦労人同盟』が結ばれたのは余談である。

十二話　黄巾党に対する会議（前書き）

すいません……今回も短いです……

十二話　黄巾党に対する会議

今俺は周瑜に呼ばれ中庭に来ている。
秘密の軍議ならばどこか人気の無い部屋でやれば良いだろうと思ったが
どこかで袁術の目が光っているんだろう。
確かにここならば盗み聞きしている奴が良く見えそうだ。
因みに孫策は袁術に呼ばれここには居ない。

「現在、荊州で暴れている黄巾党は北の本隊と南の分隊の二つだ。
兵も金も兵糧も無い我々とすれば、南の分隊にあたりたい所だが袁術のことだ、本隊に当たれと言ってくるだろう。
そこで……潺、お前の意見を聞かせて欲しい」

「いきなりだな」

まぁ、協力を惜しまないと言ったから協力はするがな。

「ふむ……袁術に兵をと金と兵糧を出させれば良いだろう？」

「「「は？」」」

そこでその反応をするか。
まぁ、しょうがないことだがな。
俺はそう思いながら説明を始める。

「まず袁術に本隊と当たる代わりに兵と金と兵糧を出せと交渉する。
それが駄目ならば袁術よりも早く南の分隊を撃破する。
そうすれば太守としての面子がある袁術は本隊を相手にすることに

なる」
俺はある程度説明し終わり茶を啜る。
……日本茶が懐かしくなった。
「……誰かある！」
俺が茶を飲んでいると黄蓋が兵を呼んだ。
どうやら採用と言うことらしい。
「はっ！」
「策殿に伝令を放て、手紙の内容は―――」
黄蓋が兵士に指示を出している間周瑜が俺を見ているのに気付いた。
何だろうと疑問に思い尋ねてみる。
「何で俺を見ている？」
「いや、良い拾い物をしたなと思ってな」
まさか、物扱いされるとは……心外だ。
「潺、お前、武はどれ程だ？」
「化け物二人とつるんでいるからな。
それなりにはある」
あの化け物二人と付き合っていると否応にも強くなってしまった。
あの二人と互角に渡り合える俺も化け物なのだろうか？

「そうか……ならばお前にはいつか部隊を預けたいな」

「名前だけだが天の御遣いが率いる部隊か……庶民が食い付きそうなネタだ」

こいつは思ったより性格が悪いかもしれない。

そんなことを思っていると黄蓋が兵に指示を出すのを終えていた。

「さて、具体的な戦術だが……簡単だ。

圧倒的な戦力の差を覆すことができて更にこちらに被害が少ない戦略が一つある」

「そんな便利な策ってありますか～？」

「あるぞ。人として考えさせられる策だが……盗賊相手には遠慮は要らないだろう」

「そうだな、それで？その策とは？」

俺は残っている茶を飲んでこう言った。

「火を使うんだ」

十三話　黄巾党討伐（前書き）

今回も短いです……本当にごめんなさい！
本当に何とかします！

十三話　黄巾党討伐

「うわぁっ！火だ！」

「暑い！暑過ぎる！逃げろ！」

「逃げるな！消火すれば良いだけの話だ！」

「無理だ！火の勢いが凄過ぎる！」

火計の効果は抜群だった。
敵は混乱し、逃げ惑い、次々に盗賊が死んでいく。

「辛いか？」

前線を眺めていると周瑜がそう尋ねて来た。
俺はその問いに首を横に振る。

「いや、辛くは無い。これが戦だ」

「ならば何故……」

周瑜は一度そこできって俺に近づく。
そして俺の顔に目元に手を伸ばしこう訪ねて来た。

「何故、泣いているんだ？」

確かに俺は泣いている。
だけど、その涙は……

「その涙は俺のじゃない。
今、この戦場で散って行く者達が流すべく涙だ」
「奴等は人を殺した獣だ。それなのにか？」
その問いにも俺は首を横に振る。
「あいつ等は食糧が無くて奪って生活するしか無かった人だ。
そしてそうなる様に追い詰めたのは漢王朝で私腹を肥やしている奴等だ。
獣と言うのならば……そいつ等だろう？」
詭弁かもしれない。
それでも俺はその詭弁を唱え続ける。
「そうか……優しいな」
「優しくなんて無いさ……昔、俺の所為で……っ！」
「？どうした？」
「何でも無い。そろそろ孫策と黄蓋が掃討行動を行う筈だ。
俺もそれに参加してくる。
そこら辺の奴等に負ける程弱くは無いから安心しろ」
「そうか……帰って来いよ」
俺は周瑜の言葉に後ろ手を振って答えた。

掃討作戦後

「終夜、強かったわね～！」

相当作戦が終わった後、本陣に戻って来た孫策がいきなり興奮した面持ちでそう言った。

「化け物二人と一緒に居たらあれ位の強さになっただけだ。大したことじゃない」

「へぇ～……ねぇねぇ、これから私のことを真名の『雪蓮』って呼んで」

「真名？」

真名とは確かその存在のその存在の本質を指す物だよな？
確か真名を知る者は、たいへんな力を手に入れると言い伝えられている筈だ。
因みにミトラ教とかそこら辺の聖典に書いてあった筈だ。

「あれ？天の国には真名は無かったの？」

「無かったが……どう言う物かは知っている」

確か一刀と矢吹はそんな物には興味ねぇとか言ってミトラ教の聖典を読まなかった筈だ。
俺も大して興味は無かったが古代ローマのことを理解するのに読んだのを覚えていた。

「因みに俺も真名に近い物を持っているが（説明中）と言う訳だ」
「分かった、で？終夜の誓名って言うのは？」
「始朝だ。終わらない夜は無い。そして、始まらない朝は無い。
その秩序を見守る者。それが俺と言うことだ」
「……終夜、私も真名を預けよう」
「周瑜もか？」
俺がそう聞くと周瑜は頷いた。
「先程のお前の言っていたことに少し感動してな。
私の真名は冥琳だ」
「あ～！お師匠様ずるいです～！私は穏って言います～」
真名を先に預けるのはずるいことなのだろうか？
「ふむ……儂も預けるかのぉ……儂は祭じゃ」
「分かった。これからも皆、よろしく頼む」
「「「ええ（は～い）（うむ）」」」
こうして俺達は本当の仲間になった。

拠点話　理不尽な罰則

突然だがサボりと言うのはいけないことだと思う。
仲間から怒られるし、信用を無くす。
それに場合によっては罰則があるのだ。
俺は今……その罰則を受けていた。
事の始まりは約二時間前の事だ。
俺は鍛練の為に中庭に居た。

二時間前中庭

『精神を磨き邪心を捨てよ』
それが師匠の教え。
だから俺は中庭で座禅を組んでいた。
俺の戦い方は矢吹や一刀の様に何も考えずに戦うのではなく
敵の動きを良く観察し隙あらば攻撃すると言う型だ。
集中力を養うのが俺の一番の修行法だ。
入って来る情報を全て遮断し、集中する。

「……」

この状態だと俺の周りの状況が良く分かる。
俺はゆっくりと近づいて来ている奴に声をかけた。

「何をしているんだ？雪蓮」

「あら？分かるの？」

俺はその声を聞いて目を開ける。
雪蓮は恐らく俺を驚かせようとしていたのだろう。
つまらなさそうな顔をしている。

「お前、ちゃんと仕事をしたのか？」

「そっちこそ、冥琳が怖い顔をして探してたわよ？」

「奇遇だな。先程俺も怖い顔をして雪蓮を探している冥琳を見つけた」

「……」

「……」

その場に流れる沈黙。
やはり両方共サボりをしていたらしい。

「ねぇ、一度手合わせしない？」

「そうだな、やろう」

俺は雪蓮の意見に賛同し大包座禅持って座禅を解いて立つ。
そして中庭の中央に立って互いの武器を構えた。

「前にも見たけど随分と細いわね」

「力で斬る武器じゃないからな。別に細くても良いんだ」

「へぇ～ちょっと興味あるなぁ～」

雪蓮はそう言った瞬間真面目な顔になり武器を構える。
俺もそれを見て大包平を構える。
お互い相手の出方を見る。
少しでもどちらかが動いた瞬間片方も動く。
そんな睨み合いの中予想外のことで雪蓮が動いた。

「雪蓮！終夜！見つけたぞ！仕事しろ！」

「げ！冥琳！？」

「待て冥琳、俺は後で仕事をしようとしていたんだ。
そんな時に雪蓮に話かけられ『言い訳をするな！』すまん……」

まさか俺が何も言え無くなるとは……
一刀と矢吹が見たら何と言うか……って雪蓮が居ない！

「雪蓮は……」

逃げられたか。
まぁ、あの雪蓮が仕事なんて簡単にする訳が無いか。

「終夜、お前は大人しくしてくれるよな？」

冥琳の顔は悪鬼羅刹すらも逃げ出す様な怖い顔で……

「……すぐにやろう」

そう答えるしか無かった。

これを読んでいる者達よ。
サボりだけは絶対にするなよ。
もししたら……大変なことになるからな。

「これも片づけてくれ」

「やっと半分終わったんだぞ！？俺に仕事をなすりつけてないで雪蓮を探してこい！」

「……ウルサイ」

「……すまん」

こんなことになるからな……涙が出てきた。

十四話　占い師の予言

「遅いな……」

俺は今、中庭に居る。
何でも華琳が街の視察がしたいそうだ。

「それにしても遅い……」

集合は正午。
太陽の傾きで時間は大体だけど時間は分かる。
大体十一時五十分位だ。
確かにまだ集合時間では無いが誰も来ていないので不安になってしまう。
華琳達のことだからまさか忘れるなんてことは無いだろうが……

「ああ、北郷か」

「お、春蘭、秋蘭と華琳は？」

「華琳様は髪の纏まりが悪い様でな、秋蘭に整えさせている」

あ～あのクルクルか～
いつの時代でも女のメイクに時間がかかるのは同じって訳だな。

「今、あんた、化粧や髪型なんて大して変わらないなんて思わなかった？」

「「そんなこと思って無いって」

あの華琳が寝癖姿で出てくる方が驚きだろう。
多分可愛いだろうけどな……

「そう言えば華琳は前回の刺史から州牧になったんだよな？」

州牧になったから季衣との約束を果たせると嬉しそうに言っていたのを覚えている。

「中央には知り合いが居たからね」

成程……桂花が桂花が中央に手をまわして華琳が州牧になるのを後押ししたのか。
でも……

「そう言うのって華琳が嫌がらないか？」

華琳は正々堂々とやるって感じだからな。
コネとかそう言うのは嫌うだろうと思うんだけど……

「別に構わないわよ」

「「華琳様！」」

華琳はそう言いながら秋蘭を連れてやってきた。
やっぱり華琳は可愛い……
あれ？そう言えば季衣はどこだ？

「華琳、季衣は？」

「盗賊の本拠地が見つかったよ。本当は春蘭か秋蘭に行って欲しかったけど自分が行くと聞かなくてね……」

「そうか……」

自分の邑と同じような目にあっている邑を放っておけないんだな……本当に良い子だ……

「じゃぁ、今日の視察でお土産でも買って行こう。視察の序にな」

「そうね。それも良いわね。それでは、桂花、留守番頼むわよ」

「そ、そんなぁ～……」

桂花は萎れてしまった。まぁ、仲間外れは堪えるよな。

「それでは、行くわよ」

華琳のその言葉と共に俺達は視察へと向かった。

街

俺は今、華琳と街の視察をしている。最初は春蘭が華琳としたいと言っていたが華琳が一言『春蘭』と言ったら

渋々了承してくれた。
あら？あれは何かしら？」
「ん？」
華琳が指した方には何かの装置が置いてあり籠を売っているらしい少女が居た。
俺は気になってその少女に話しかけた。
「なぁ、その装置何だ？」
「お！兄さん目が高いの～！これは全自動籠編み装置や！」
怪し過ぎる……
でも、試してみないと分からないな。
「ちょっとやってみるか。
華琳、良いだろ？」
「ええ、壊さない様にね」
「まさか、子供じゃないんだから」
俺はそう言いながら籠編み装置に近寄る。
「そっちの取っ手をグルグル～っと回しや」
言われた通りに取っ手を回してみる。
すると本当に籠が出来上がってくる。

結構すごいな……
殆んど手動の件を除いてな……

ビキビキッ……

「ん？」

何だかヤバイ音が鳴った様な気が……

「ヤバイで……」

やっぱりか！
俺は籠売りの少女の言葉を聞いて一瞬で華琳の傍に行き華琳を抱えてその場から離れた。
後ろで『ドカァァァァッン！』って音がした様な気がしたけど気のせいだろう。

集合場所

「それで？何で揃いも揃って竹籠を抱えているのかしら？」

集合場所に一番に着いてそれが華琳の最初の一言。
二人は先に着いていたが何故か二人共籠を抱えていた。

「それが、今朝部屋の籠の底が抜けているのに気が付きまして……」

あ～秋蘭ってそう言うのを気にしそうだからな～

「あなたのことだから気になってしょうがなかったのね。
それで、春蘭は？何か山ほど入れているようだけど？」
春蘭は何故籠を抱えているのか分からない。
春蘭は部屋の籠の底が抜けてようが何だろうが気にする様な子じゃない筈だ。
「これは季衣の土産の服にございます！」
本当か？パッと見だが華琳並の大きさのような気がするが……
言わない方が良いんだろうな。
「今回の視察の件は報告書に纏めて報告しなさい。一刀もよ」
マジかよ……はぁ……
「そこのお主」
俺が項垂れているところに占い師らしい人が話しかけてきた。
顔を隠しているから女か男か良く分からない。
「悪い、華琳は占いは信じないんだ」
「控えなさい、一刀」
「？分かった」
華琳にそう言われて俺が引き下がると占い師はこう言ってきた。
「強い相が見えるの……人を従え、智を尊び、この国を満たす相じ

や」

「ほほぅ、良く分かっているじゃないか」

春蘭が胸を張りそう言うと占い師はこんなことを言いだした。

「しかし、お主の力、今の弱った国では収まりきらぬ。その野心、留まるを知らず。溢れ出した野心は、やがて国を犯し、野を侵し、いすれこの国に名を残すほどの、類い希なる奸雄となるじゃろう」

「貴様！『秋蘭、華琳が何も言わないんだ。ここは下れ』分かった……」

あぶねぇ……俺が止まらなかったら秋蘭はこの占い師を矢で撃ってただろう。

秋蘭は怒る時にはものすごく怒るからな。

「つまり乱世においては奸雄になると？」

「左様、それも今までの歴史に無いほどのな」

「そう……一刀、この者に幾ばくかの謝礼を」

「分かった」

俺は占い師の持っている杯に言われた通りの謝礼を入れた。

華琳が愚弄されたのに怒らないってすごいな……

「世の奸雄、大いに結構。その程度の覚悟もなくてはこの乱れた世に覇を唱える事など出来ない。そう言う事でしょう」

成程、そう言うことね……
ホント、すごい奴だ……

「それからそこのお主」

「俺か？」

占い師は少し間を置いてこんなことを言った。

「お主が友を斬ることを選べばお主はある者を覇王にすることが出来るだろう。
お主が友を斬らないことを選べばお主はある者を幸せに出来るだろう。
どちらを選だとしてもお主の望む未来を創ることが出来る。
ゆっくりと選ぶが良い」

「！」

占い師は俺の悩みを見透かしたかの様にそう言って立ち去ろうとする。

「待ってください」

「何じゃ？」

「ありがとうございます、ゆっくり選ぶことにします」

俺がそう言うと占い師は立ち去って行った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4104x/

三人の天の御遣い・改

2011年12月11日16時45分発行